

加賀の伝統産業と技術の伝承

元金沢大学 黒部 利次

1. はじめに

平成 15 年度精密工学会の秋季大会は北陸の地富山県で開催されるが、藩政時代富山県は越中と呼ばれていた。福井県の越前、石川県の加賀・能登、新潟県の越後を含めて“越の国”と通称されている。越の国加賀金沢は、尾張（愛知郡荒子村）の前田利家が天正 11 年に当地に入来して切り開いた城下町である。利家は、諸工芸の振興を積極的に図り、今日伝統工芸と呼ばれる各種の産業を興した。

加賀の伝統工芸といえば、加賀友禅、漆器、九谷焼、輪島塗、金箔、等がすぐに口頭にのぼるが、これらはいずれも厳しい時代の変遷を経てなおかつ今日加賀の地の重要な産業として生き残っているものばかりである。しかしながら、加賀象嵌に代表される加賀の金工は何故か歴史の表舞台から姿を消してしまった。加賀金工は、その昔“加賀の工芸”の真髄を表わすものであって比類なき技術の最高峰を表わす代名詞でもあった。それが何故衰退しなければならなかったのか、今日の産業の栄枯盛衰とも重なりここではその原因を探ってみたいと思う。

2. 加賀の金工技術

加賀・能登の地には、利家が入来する以前から土地固有の諸工芸が発達していたことが歴史書にみえる。しかしながら、今日広く知られている工芸品の多くは江戸時代以降に興り栄えたものである。ここでは、加賀金工について概観しそれが興隆し衰微した原因について考えてみたい。

利家は、金沢の地に入城するにあたって多くの金工職人を同道させている。それは、武器の修理・調達と日常品の製作を行わせるためであった。利家は入来後、洛中第一級の金工師（後藤家の者）を金沢の地に招聘し、技術の移転と向上を図ったと伝えられている。後藤家は、初代祐乗が室町幕府の足利義政に仕えた当代きっての名工であって、その子孫は歴代名金工家として我が国金工に大きな足跡を残した名家であった。その後、三代藩主利常は鉄象嵌を特徴とする京都伏見からも工人を招き技術の導入と高度化を図った。加賀金工の名を決定的にしたのは、八代將軍徳川吉宗に献上された象嵌鏡が殊の外見事で、諸大名の垂涎の的となったことである。その象嵌鏡は平象嵌を巧みに利用した製品で、高度な技術を駆使し配色の妙を得た出色の出来映えであったという。五代藩主綱紀は、諸工芸の振興に力を注ぎ藩の細工所を拡充改組しその充実を図った。御用職人（家彫り）、町職人（町彫り）にかかわらず優れた技術を有する職人をどしどし登用し、互いに切磋琢磨させ技術の高揚を図った。また、“百工比照”を作り、技術の修得と高度な技術の保持に努めた。

図 1 に、加賀象嵌（平象嵌）の製作工程を示す。加賀象嵌は、^{カラカネ}唐金と呼ばれる銅合金（素地）の製造にはじまり、下図・給付け 鑿による溝彫（アリ溝）り 紋金（金・銀・銅等の金属及びその合金）の打ち込み 磨き 着色 加飾、等の幾段もの工程を経て造られる。平象嵌の場合、アリ溝のため嵌合した紋金は絶対離脱することがない。

3. 伝統工芸から伝統産業へ

加賀象嵌に象徴される加賀金工は、江戸期以降衰微の一途を辿っている。その理由を列記すると、藩が消滅し禄の手当てが無くなった、加賀象嵌は高度な技術を必要とし製作に時間がかかる、そのため製品は必然高価なものとなる、技術が高度であるためその修得に長い年月を要し、若い世代の意向とマッチしない側面を有している、等が

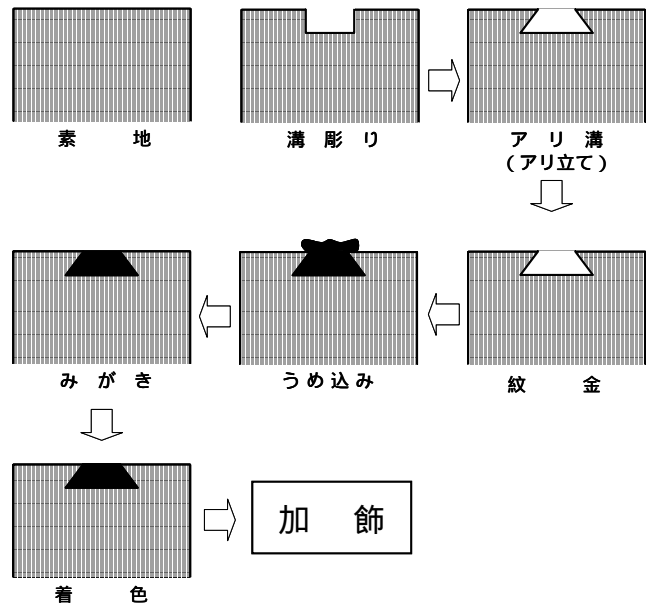


図 1 加賀象眼（平象眼）の製作工程

挙げられる。

いま述べたように、幕藩体制が崩壊して明治維新になると、禄を貰って細工所に勤めていた金工職人は失職し路頭に迷うこととなった。このような状況にあって明治も 10 年余り過ぎる頃、金沢市長（二代目）をしていた長谷川準也は銅器会社を設立し、多くの職人に活路を与えた。武具をはなれ藩政期の高度な技術は置物や花器等に活かされることとなった。その製品は海外で高い評価を受けたが、高価であるが故に販売は限定的なものであった。時代も明治から大正・昭和へと移るにつれて、加賀の金工は徐々に衰退していく。幾度かの戦争も衰微に拍車をかけた。

第 2 次世界大戦後は、加賀の伝統工芸は着実に回復・復興してくる。中には工芸の範疇を超えて産業の域に達するものも現れてくる。しかし、加賀金工だけは未だに水面下にあって忘れ去られようとしている。

4. 伝統技術の保存と育成

加賀の伝統工芸は、石川県の重要な産業の根幹をなしている。このため、県や市は伝統技術の保存と人材の育成に力をいれている。例えば、能登輪島には輪島塗があり、それは工芸史的にみて貴重であるばかりでなく、芸術的にも価値が高い、と評価されている。石川県では、漆芸技術の保存と継承、そしてさらなる発展を願って昭和 42（1967）年に石川県立輪島漆芸技術研修所を設立し、重要無形文化財保持者（人間国宝）を講師に迎え、研修が絶えず行われている。

しかしながら、加賀金工に関しては何らのサポートもない。工芸のジャンルの中に明日の産業の芽が内包している場合もある。複雑にして高度、ノウハウの塊（工芸）、の技術の中にこそ地方の活力の源があるように思う。

5. おわりに

今日の産業は、工芸にその源を発している場合が多いと思われる。産業の空洞化や衰退は、社会構造の変革に連動して惹起していると考えられるが、技術革新に賭ける情熱まで空洞化はしていない。今日、いま一度技術の源流に思いを馳せ、明日の活力を取り戻したい、と念願するものである。